

〈実践報告〉

文学作品を使った授業の実践報告 —「コミュニケーション」の意味を模索して—

濱 奈々恵

要約

本稿は平成25年度の2年次英語教育で、シャーロック・ホームズのテキストを使った授業の実践報告と、初回、及び学期末アンケートの結果を分析・考察するものである。近年、英語運用能力の中でも特にコミュニケーションが重視され、TOEIC、TOEFL、英検などの数値がコミュニケーション能力の評価に利用されることが多い。しかしこの「コミュニケーション」が指す意味は漠然としており、学生の間でも「英語を」話したいという意見は目立つものの、「英語で何を」話したいのか、具体化した意見はまれであった。現代社会が求めるコミュニケーション能力と、学生が身につけたい、あるいは身につけなければならないと考えるコミュニケーション能力、また外国語教員が考えるコミュニケーション能力が乖離している今、ことばに携わる教員として何をすべきか模索した。英語訳出による日本語力の向上、他者理解、異文化理解、会話の糸口を得るための情報収集と表現力の磨き方などを提示したところ、学期末に実施したアンケートからは、学生個人に様々な学びがあったこと、また本当の意味での「コミュニケーション」を楽しめる素養を身につけた学生像が浮かび上がった。

1. はじめに

平成24年6月、政府はグローバル人材育成推進会議による「審議まとめ」を出し、理想的な「グローバル人材」とその育成方法について触れている。これによれば、「グローバル人材」に必要な要素は、何よりも「語学力・コミュニケーション能力」であり、これに次ぐのが、「積極性」や「協調性・柔軟性」、「異文化に対する理解」となっている。外国語教育においてコミュニケーションを重視する姿勢は以前からあり、特に平成14年7月に文部科学省が「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」を策定し、翌年にその「行動計画」を発表して以降、特に強くなっているように思われる。今回の「審議まとめ」でも「コミュニケーション能力」、特に交渉における「コミュニケーション能力」の養成が喫緊の課題となっている。

「コミュニケーション能力」の有無を測る際に必ず持ち上がるのが、数値による評価である。やはり「審議まとめ」でもTOEIC、TOEFL、英検が評価基準の一つに挙げられ、しかもこれを大学入試の一部に組み込む案まで出ている。TOEIC、TOEFL、英検そのものは数値や合否で判断される分、良くも悪くも、外国語学習の動機づけになりやすい。目標に達するにはその分の努力と理解力が必要であるため、これらの検定そのものを否定するつもりはない。好きでやっている学生、必要に迫られて仕方なくやっている学生など、

いずれの場合であれこのような取り組みに励む学生を教員としてサポートすることは、大きな喜びである。ただ、英語という「ことばに携わる教員」としては、数値の高低だけに目を向けることに抵抗があるのも事実である。特に、大学の一般英語の授業で何を読んだか、という問いに文学作品の名前が出てこないのはいささかさみしいものがある。現代社会が求める「コミュニケーション能力」に固執するばかりに、言葉の面白さや他者を理解する能力を養うきっかけを失うのはもったいない。

そこで一般英語の授業で、シャーロック・ホームズを題材にしたテキストを使用し、文学作品を堪能しながら現代社会が求める「コミュニケーション能力」育成への筋道をたてた。シャーロック・ホームズは文学を専門にしていない学生にとってもなじみがあり、事件の謎を解くためには推理力や文章理解力、また細かな点への気づきが面白さを左右する。原書そのものを利用するのは少し難しいのではないかと考え、今回は *Mystery Tour with Sherlock Holmes* (Cengage Learning, 2009) を使用することとした。6章で1話完結型の構成になっており、内容理解を問う問題や、リスニングで情報を求める問題、また文化的な背景説明など、細かな点で配慮が行き届いたテキストである。本稿はそのテキストを使った授業の実践報告と、アンケート結果を分析・考察するものである。対象となった学生は商学部経営学科（以下、商経）2年次20人、人間環境学部児童教育学科（以下、児教）2年次23人の合計43人である。学生には初回の授業時に、英語学習および海外経験に関するアンケートを行い、また最終の授業時にフィードバックを求めた。まず第2章において、初回アンケートの分析と考察を行い、続く第3章で授業の実践報告を行う。第4章では、最終的なフィードバックを分析・考察し、第5章において結論をまとめる。

2. 英語学習および海外経験の有無に関する調査

平成25年9月、英語学習の実態調査および海外経験の有無に関するアンケートを行った。これによって学生が「英語」そのものとどのように関わってきたのか、また今現在、関わっているのかを把握することに努めた。回答は初回授業時に行い、配布されたアンケート用紙に記入する方式を取った。本章では商経17人、児教21人、合計38人のアンケート結果を学生のコメントと合わせて、分析・考察する。質問は5項目あり、その内容およびデータは本稿末尾に資料1として添付している。

2.1. 重視してきた技能、身につけたい技能

2年次の「英語」はプレイスメントテストや学籍番号によらないクラス分けとなっている。学生がシラバスを元にして受講を希望するため、講義内容への期待や好みはある程度、一致していると考えられる。しかしその一方で、英語力には若干のバラつきが見られる。様々なバックグラウンドを持つ学生が集まる以上、「英語」への関わり方や得意・不得意などは一様ではない。そこで質問1として、これまでに重視してきた技能についてたずねた。38人のうち25人（全体の65.8%）が「リーディング」を選択し、次いで「ライティング」が9人（全体の23.7%）、「リスニング」が3人（全体の7.9%）、「スピーキング」が

1人(全体の2.6%)という結果になった。質問2では、これからどの技能を最も重視して身につけたいかとたずね、現状と目標の関係性を探ることとした。38人のうち20人(全体の52.6%)が「スピーキング」を選び、次いで「リスニング」が13人(全体の34.2%),「リーディング」が5人(全体の13.2%),「ライティング」が0人となった。苦手意識がある技能、あるいは取り組みが浅いと判断した技能を選ぶ傾向が高いといえる。学生がこれまでに重視してきた技能と、これから重視したい技能がどのように変化しているのか、この2つのデータを整理すると表1のような結果が得られた。

重視してきた技能	重視したい技能	商経(17人)		児教(21人)		合計(38人)	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
リーディング (25人)	リーディング	2	11.8	1	4.8	3	7.9
	リスニング	3	17.6	5	23.8	8	21.1
	ライティング	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	スピーキング	5	29.4	9	42.9	14	36.8
リスニング (3人)	リーディング	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	リスニング	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	ライティング	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	スピーキング	1	5.9	2	9.5	3	7.9
ライティング (9人)	リーディング	2	11.8	0	0.0	2	5.3
	リスニング	3	17.6	2	9.5	5	13.2
	ライティング	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	スピーキング	0	0.0	2	9.5	2	5.3
スピーキング (1人)	リーディング	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	リスニング	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	ライティング	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	スピーキング	1	5.9	0	0.0	1	2.6

表1. これまでに重視してきた技能とこれから重視したい技能

「リーディング」重視の学習法を取ってきた25人の学生のうち、合計14人の学生が身につけたい技能として「スピーキング」を選び、また8人の学生が「リスニング」を選択している。これらの対人型技能を選んだ学生のうち、「スピーキング」を選択した学生はその理由として、「話せるようになりたい」、「一番実践的だと思うから」、「コミュニケーションのツールだから」などを挙げ、また「リスニング」を選択した学生は「聞き取ることに慣れていないから」や「聞き取れるようになりたい」といった理由を挙げている。スピーキングやリスニングをコミュニケーションの最たるツールと考える学生は多いが、学生が「コミュニケーション」をどのように捉えているのか掴みがたい。というのも、単に「英語を」話したい、「英語を」聞きたい、という発言は目立つものの、その中に「英語で何を」話したいのか、あるいは「英語で何を」聞きたいのかを具体化した学生はわずか1人(「洋画やミュージカルを英語で楽しみたいから」)にとどまっているからだ。その一方、「リーディング」を重視してきた25人の学生のうち3人が引き続き、あるいは今よりも「リーディ

ング」を重視したいと考えている。そのうちの2人は「英語の原書を読みたい」と回答し、残り1人は「英語のニュースが読めれば情報源が増えるから」と答えている。現時点で英語をどのように運用したいのか、明確な目標設定がある学生数はごくわずかである。「英語で何を」読みたいのか、話したいのか、聞きたいのか、書きたいのか、そのきっかけ作りを授業内で行っていく必要性を感じた。

続いて、質問3で海外経験の有無についてたずねた。目的や期間は特に定めず、数日の旅行から語学研修まで、幅広い意味での海外経験を調査したところ、38人のうち商経で3人、児教で10人が「あり」と回答し、その多くは1週間未満の修学旅行であった。表2は海外経験の有無と、質問2でたずねた「これから身につけたい技能」の関係をまとめたものである。

	商経(17人)				児教(21人)				合計(38人)			
	あり(3人)		なし(14人)		あり(10人)		なし(11人)		あり(13人)		なし(25人)	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
リーディング(R)	0	0.0	4	28.6	0	0.0	1	9.1	0	0.0	5	20.0
リスニング(L)	2	66.7	4	28.6	2	20.0	5	45.5	4	30.8	9	36.0
ライティング(W)	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
スピーキング(S)	1	33.3	6	42.9	8	80.0	5	45.5	9	69.2	11	44.0

表2. 海外経験の有無と身につけたい技能

滞在先の生活環境や経験に応じて回答に変化が生じるだろうが、海外経験があると答えた学生は皆、スピーキング、あるいはリスニングの技能を向上させたいと考えている。実際、ホームステイの経験を持つ学生のアンケートに注目すると、その実態がよくわかる。例えば、3週間ハワイに滞在した学生Aはスピーキングの向上を目指しており、その理由として「英語を話せるようになりたい。外国人と会話したい」と記している。またオーストラリアに2週間滞在した学生Bも「外国の人とコミュニケーションを自由にとれるようになりたい」と答えている。スピーキングとリスニングをスムーズに行いたいという思いは、多くの学生に共通しており、海外経験がないと答えた学生の場合も同じである。ただやはり、短期間であれ異文化に身を浸した経験がある学生の方が、スピーキングやリスニングを「必要」や「重要」と言い表す傾向が強かった。

2.2. 英語学習のパターン、題材の調査

質問4では受講学生が普段どのような学習パターンをとっているのか、またどのようなものに興味があるのかを探った。①洋書や英字新聞を読む、②洋楽を聴く、③英語の音声(歌以外)を聞く、④洋画を見る、⑤単語を覚える、⑥英語で文章を書く、⑦英語で会話をする、⑧辞書で調べる、⑨海外旅行、語学研修に行く、⑩検定試験を受ける、の10項目それぞれを「好き、得意、よくする」、「ふつう、たまにする」、「嫌い、苦手、全くやらない」の3タイプに分類するよう求めた。図1は商経と児教の2クラスを合わせた結果である。

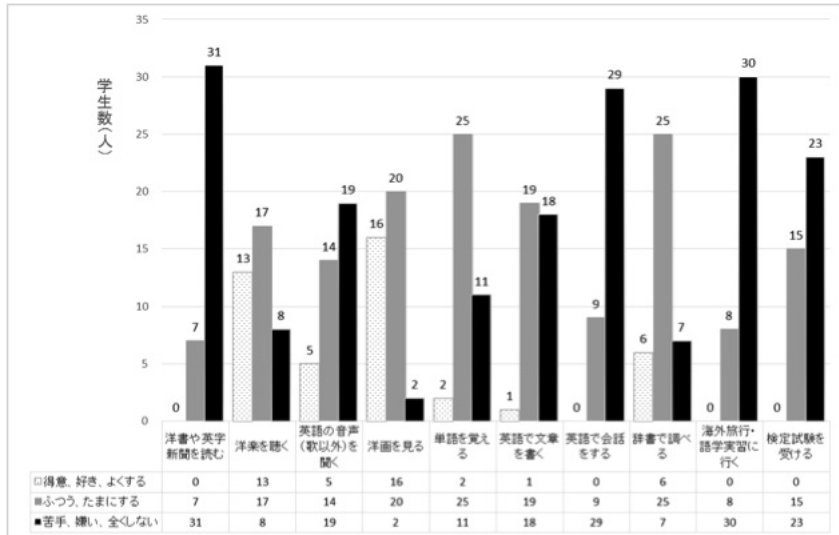


図 1. 商経・児教のクラスにおける英語学習パターン

「得意、好き、よくする」ものとして多くの学生に選ばれたものは「洋画を見る」(16人)と「洋楽を聴く」(13人)であった。また「ふつう、たまにする」ものとして最も得票数が多いのは「単語を覚える」(25人)と「辞書で調べる」(25人)となった。つまり多くの学生は娯楽性が高いものに興味を持ちながらも、もう一方で辞書を使ったり、単語を覚えたりという外国語学習に必要な作業もある程度は行っていることがわかる。「苦手、嫌い、全くしない」で最も票を集めたのは「洋書や英字新聞を読む」(13人)であった。多くの学生が身につけたいと考えていたスピーキング(「英語で会話をする」)に関しては、29人の学生が「苦手、嫌い、全くしない」を選択している。おそらく「嫌い」という感情よりも「苦手」あるいは「全くしない」というのが主な理由であろう。以上の点から、普段、自分ではあまり手に取ることのない洋書、しかも娯楽性のある洋書を選び、十分に身につけたと思われる読む力を使って、「読める表現」を「使える表現」に転換するやり方を指導すれば、異文化への造形を深めながら、深みや温かみのある言葉を運用できる可能性が高まると考えた。

「検定試験を受ける」に関しては23人(全体の約60%)の学生が「苦手、嫌い、全くしない」を選択した。だが質問5で検定に関して目標があるかと質問したところ、英検では準2級、2級、準1級、TOEICでは500点、600点、700点との回答を得た。現段階ではまだ対策の勉強は始めているものの、漠然とした目標設定をしている学生は少なくない。実際、平成25年度を通して、就職とTOEICの点数に大きな関わりがあると感じる学生から質問を受けることが多かった。中には特定の会社名を挙げながら、「そこで働くためにはTOEICで〇〇点が必要らしい」と話す学生もいた。

現代社会が求めるコミュニケーション能力と、学生が身につけたい、あるいは身につけなければならないと考えるコミュニケーション能力、また外国語教員が考えるコミュニ

ケーション能力が時おり、乖離している場合がある。そのため、勉強方法や題材に偏りが出てしまい、本来、語学の授業で重視すべきことが削ぎ落とされてしまうことも起こりがちである。アンケート結果と分析を踏まえて、当初シラバスで設定していた内容に多少の変更を加え、以下のような到達目標を設定した。

- 1) 状況や設定に合う日本語を選び、細かな点にも気づく力をつける
- 2) 英語だけでなく、国や時代が違う異世界・異文化についても理解を深める
- 3) 「読める英語」を「使える英語」に転換させる
- 4) 「文学の英語」、「会話の英語」、「受験英語」、「検定英語」という区分によらない、共通の勉強方法を身につける

これらの到達目標に沿ってどのように授業を行ったのかを次章で示していく。

3. 授業実践報告

使用した教材は以下の3点である。

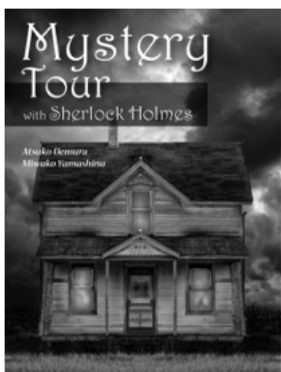


図 2. 使用テキスト

*Mystery Tour with
Sherlock Holmes*
(Cengage Learning, 2009)



図 3. 映像教材

*The Complete Collection :
Sherlock Holmes*
(ITV Studios Home
Entertainment, 2009)

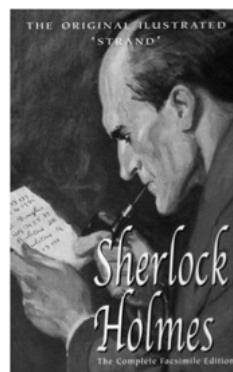


図 4. 配布資料

*Sherlock Holmes :
The Complete Stories*
(Wordsworth, 2006)

※図 2 は Cengage Learning から、図 3 と図 4 は Amazon.co.uk から画像を使用している。

教科書として採用した *Mystery Tour with Sherlock Holmes* は、オリジナルテキストをリライトしたものである。1章から6章に“The Red-Headed League”（「赤毛連盟」）、7章から12章に“The Adventure of Copper Beeches”（「ぶな屋敷」）が取りあげられている。1章あたり8ページの構成で、長文、内容に関する問題、リスニング問題とディクテーション、要約完成、そしてその章で関わりのある文化的な内容に説明がつけられている。毎回の授業ではテキストを中心に扱い、その後、その回に読んだ箇所までを映像で確認することとした。文字だけではわかりにくい動きや状況を知る手助けになり、面白さが増す効果がある。またテキストで目にした言葉が実際に使われている場面を目にし、耳にすること

で、単なる文字が生きた言葉として認識しやすくなる。使用したのはジェレミー・ブレット (Jeremy Brett) が主演する元祖シャーロック・ホームズものである。これはオリジナル版をかなり忠実に再現したものであるため、内容と雰囲気は損なわないものである。またこの DVD Box は本稿の執筆者が英国滞在中に購入したもので、当然、日本語字幕はついていない。そのため、速さと発音の両方で容赦のないイギリス英語についていくことが必要となる。ただ、テキストで内容を理解した後に見ることにしていたため、それほど困難は生じないだろうと考えた。

第1回目の授業では、イントロダクションとしてアーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle) 雑学クイズを行い、作者の人物像について探った。出身地や前職、ドイルに関するエピソードや噂などに関するクイズを出し、それを画像と交えながら紹介した。また学生には参考資料としてオリジナル版のコピーを配布した。テキストとしてリライトする際に省かれてしまった箇所、あるいはDVD版との違いを検討する機会を与えるのが目的である。ただ、テキストをやるだけでもかなりの時間を要するため、この資料はあくまでも参考程度にとどめ、あとは教員側から学生に補足説明として紹介することとした。オリジナルを読むか否かは学生に任せ、今すぐでなくともいつか手に取る日が来ることを願い、知的好奇心を掻き立てられるように努めた。

3.1. 授業構成

前述したとおり、第1回目の授業ではイントロダクションを行った。また本講義では2回の試験を課していたため、第8回目の授業時ではテキストの第1章から第6章 (“The Red-Headed League”) のまとめ試験、第15回目の授業では第7章から第12章 (“The Adventure of the Copper Beeches”) の試験を行った。そこで本章ではこの3回分を除く授業の構成と実施内容についてまとめていく。

授業は通常、以下のような流れをとった。

- 1) 導入 (前回のストーリー確認、および今回のストーリー展開の予想)
- 2) テキスト訳出、各種問題
- 3) DVD鑑賞、内容確認
- 4) 補足プリント

物語という性質上、ストーリー展開や人物関係を把握する必要がある。毎回、授業の冒頭には5分程度で簡単な説明を加えた。その後、テキストの精読力を高めるため、指名制で訳出を行った。その後、その回に読んだ箇所までをDVDで確認した。DVDを鑑賞する時間は概ね5分から15分程度になった。最後にテキストで使われた表現を応用できるように、5項目の問題を集めたオリジナルの補足プリントを使用した。以下、前章で挙げた到達目標に従って、授業内での取り組みについてまとめていく。

3.2. 訳出による理解力養成

学生には毎回、長文箇所を予習してくるようにと指示を出した。事前に辞書を引いているため、訳出はかなりスムーズに行われた。例え言葉の取り違いがあっても、その場で辞書を引き直す作業をするだけで問題は解消された。それでもやはり2つの問題があった。1つめは、状況や人物関係を把握する理解力が欠如していること、そして2つめが「訳し方」である。

まず1つめの問題点について述べたい。物語を読む際に特に必要な要素は、話の展開を理解することと、人物関係の整理にある。誰がどこにいて何をしているのか、また人物1と人物2の関係性を把握せずに、物語を理解するのは難しい。本講義のテキストには主人公の探偵をはじめ、質屋の店主、若い従業員、大銀行の頭取、屋敷の主人とその妻、子どもたち、召使い夫婦、若い家庭教師など、立場も年齢も異なる様々な人物が登場する。同じ人物でも対話の相手が変われば立場が変わるため、当然、言葉遣いにも変化が生じるはずだ。ところが、学生たちには「I = わたし」という訳語が定着しているため、大人であろうが、小さな子どもであろうが、話者が「I」であればすべて「わたし」となる。そのため、親子関係や上下関係などが全て消滅したままになりがちであった。これは英語の理解力ではなく状況を理解する能力に関わっており、大仰な言い方かもしれないが他者理解に直結する問題である。話者の状況や感情、対話者との関係性を「読む」力は、人と人とのコミュニケーションにおいて必ず生きてくるため、この姿勢を失わないようにと徹底して指導した。また本作品は推理小説の側面があるため、小さな点にどれだけ気づけたかによって面白さが変わる。なぜ夫婦の長女が“his daughter”として紹介されるのか、なぜ作中の召使いには「大酒飲み」という属性が付与されているのか、また「大酒飲み」であることが物語でどう生かされるのか。小さなヒントをどれくらい拾えるか、あるいは人が気づかない点にどれくらい気づけるかなど、学生に「細かな読みの姿勢」が定着するよう指導した。

2つめの問題点が「訳し方」である。前述したとおり、学生には丹念に辞書を引くことを徹底させたため、一応の解釈は提示された。ただ時おり、「日本語らしさ」が欠けていたことも事実である。例えば、第2話の“The Adventure of the Copper Beeches”の中に、次のような発話がある。屋敷にある、開かずの間に娘を閉じ込めていたルキャッスル(Rucastle)は、その秘密がバレたところで犬小屋に走り、お腹を空かせたマスタフ犬にホームズ一行を襲わせようと画策する。だが、結局襲われたのはこのルキャッスルである。騒ぎを聞きつけた家庭教師のハンター嬢(Miss Hunter)は、“Someone has let the dog loose. And he hasn't been fed in two days. Quick, quick, or it'll be too late!” (76)と叫ぶ。これを訳出するように求めると、学生Cは「急いで、急いで、そうでなければそれもまた遅くなるでしょう！」と訳し、学生Dは「早く、早く、でなければ遅くなりすぎますよ！」と訳した。学生Cの場合はtooの取り違いがあったため、tooの別の意味を踏まえてもう一度訳すように促すと、概ね学生Dと同じような訳になった。(母語に)訳すという作業は、辞書にある言葉をただ当てはめればいいのではなく、それが自然か、また日本語として通

じるかも考えなければならない。そう考えると、外国語教育は日本語教育も担っているわけである。「早く、早く、手遅れになってしまうわ!」という訳を提示しながら、意識的に日本語を見直すように促した。

「訳し方」に関してもう1つ気になった点が、訳す順番である。例えば“And he seized my hair in both his hands and tugged until I yelled with pain.” (16) の場合、物事は「髪を掴む」「引っ張る」「叫ぶ」の順で起こっている。だがuntil 以下を先に訳して前に引っ掛けるという訳に慣れているためか、どの学生もuntil が来ると必ず後ろから前に持ってくる。“During those eight weeks, I wrote about Abbots and Archery and Armor and Architecture, and was nearly ready for the ‘B’ volume when suddenly the whole business came to an end.” (21) の場合も同様で、when 以下から先に「突然、仕事が終わりになった時、私は『B』巻に進もうかという頃だった」となる。後ろから前に訳すことの問題点は、まだ出ていない情報を先に出してしまうことで面白さや驚きが半減してしまうことにある。だがそれ以上に問題になるのは、学生たちが目標に挙げた TOEIC, TOEFL, 英検では、このやり方が妨げになるということである。限られた時間の中で大量の文章や音声を整理する際、後ろから前に訳すやり方に慣れてしまっていると、そのスピードについていくことはできない。特にリスニング問題では思考が停止して、聞き取れないままで終わる場合が多い。学生に訳出を指導する際には、検定等への対応も意識して、左から右へ、前から後ろへという技術を習得するように訓練した。

スピーキングやリスニングを中心にした「コミュニケーション」が重視される一方、「訳出」は旧来型の学習方法として影を潜めつつある。しかし、細かな点に意識を向ける姿勢や、相手に伝える日本語への置き換えなどは、これから社会にでるにあたって身につけておくべき能力である。また単に訳すだけでなく、きちんとした英語の表現力をつけるやり方、あるいは各種検定に対応できるようなやり方を教えれば、学生はこれからも自分で学習を継続させることができる。授業の回を重ねるごとに注意点が減っていったことを考えると、教員と学生の間で十分に到達目標を共有できたと考えている。

3.3 異文化・異世界への理解

「異文化理解」は現代社会のキーワードともいえるもので、本稿の冒頭で取り上げた「審議まとめ」でも「異文化に対する理解」は重要項目となっている。「異文化理解」といえば世界には自分たちとは違う人たちがいる、ということに終始しがちだが、授業内では単にそれだけにとどめないよう工夫を凝らした。本講義で取り上げたテキストは19世紀のイギリスを舞台にするものである。そのため、地域と時代において、現代とは大きな隔たりがあることに配慮しなければならない。テキスト内では“Background Tour!”というコーナーに説明がつけられているが、授業内ではさらに自分たちと比較できるような情報を提示した。その点について触れておきたい。

“The Red-Headed League”は大銀行の大金を狙う窃盗団の話である。銀行に隣接する質屋に目をつけた青年は、店主の目を盗んで地下にトンネルを掘る作戦を立てる。青年

は質屋を無人にするために、店主に「赤毛連盟」という組織が簡単な仕事をしてくれる仲間を探していると伝える。給与は“a salary of 4 pounds a week” (8)、仕事内容は“to copy *Encyclopedia Britannica* page by page” (18) となっており、訳出そのものには何の問題もない。そこで「週給4ポンド」が日本円でいくらになるのか予想してもらったところ、現在のレートでそのまま計算する学生が多かった。そこで“Measuring Worth”というインターネットサイトで換算の仕方を教授し、現代の額と比較するよう促した。またcopyという概念も現代の考えが邪魔になりがちである。現代のようにボタン一つで解決するのは“photo-copy”であって、この“copy”は「手書きでの書き写し」であることを伝えた。訳出で理解していたつもりでも、時代や国の隔たりに合わせて現代の思考回路を変える必要性を説いたところで、ようやく驚きを共有できたように思う。

もう一つ、本稿の執筆者が「異文化理解」を伝える際に重視するのは、単に違いの説明にとどめないことである。話がポンドの話に及んだところで、イギリスの造幣局のホームページを見せながら、さらなる情報提供を行った。イギリスのコインには様々なデザインがあり、その数は例えば50ペンスでも1ポンドでもそれぞれ20種類を超えている。デザインの意味を知るだけでも勉強になるが、それを集めるのも大きな楽しみである。その意味で考えると、Royal Shieldは最も「楽しい」コインと言えるかもしれない。



図5. Royal Shield

(英語版 Wikipedia の 'coins of the pound sterling' の画像を使用)

2008年に造幣局による一般公募で選ばれたこのデザインは、6種類のコイン（1ペニー、2ペンス、5ペンス、10ペンス、20ペンス、50ペンス）を集めて並べると1つの盾（上部1ポンドコインのデザイン）になる。授業内でこの画像を提示し、また本稿の執筆者が集めた実物を見せて、理解を共有した。異文化を知ることは国内でもできる。だが、それと同時に現地でしか味わえないこと・楽しめないこともある。旅行や語学研修などで海

外に行くチャンスがある学生には、出発前に情報のアンテナを張る癖をつけて欲しい。というもこのような小さなものが会話の糸口になることが多いからだ。別の国から来た留学生に Royal Shield を知っているかと聞けば、そこから会話がスタートするであろうし、Royal Shield を集めていると話せば、それがきっかけで仲間が増えることもある。初回アンケートでも明らかになったように、多くの学生はスピーキングやリスニング力をつけさえすれば、「コミュニケーション」が取れると考えているふしがあった。確かにこれも一理あるのだが、豊かな「コミュニケーション」を成立させるためには、まずは自分がいろいろなことを知ること、つまり話のネタとして共通の知識を増やす必要もある。楽しみは身近なところにくらでも転がっており、それを事前に知っているか否かで、理解の幅や深さが大きく変わり、これから過ごす時間に味わいが増す。「異文化」について触れる際には、単に「世界にはいろいろな人がいるのだ」というだけに終始しないよう心がけ、会話の糸口を自分から見つけられる人間になるよう指導した。

3.4. 応用力の養成

「コミュニケーション」を成立させるためには、知らないことをたずねたり、自分から説明したりすることが必要となる。とぎれとぎれの英語でも会話は成立するが、やはりきちんとした英語のデータベースをつくっていくことも必要である。そこで、毎回、授業の最後には5項目に分類した補足問題を実施した。「読める英語」を「使える英語」に転換させることと、「文学の英語」、「会話の英語」、「受験英語」、「検定英語」に分けない勉強法を身につけることが目的である。実際に配布したプリントは本稿末尾に資料2として添付している。

第1項目は語彙力強化を目的とした問題である。各章で使われた語について、英語を日本語に変換するもの、品詞を変えて書き改めるもの、類語や対義語、日本語から英語に変換するものの4タイプを用意した。語彙力を強化すること、時間制限がある各種試験で素早く解答できる能力をつけること、そして各章でどのような類語や対義語が出ていたのかを確認することを目的とした。第2項目は表現問題である。覚えた単語を運用できるように、文章問題として使い方のヒントを提示した。第3項目は単語問題である。これは英語で読んで英語で答える問題で、各章で使われた語に関して問う問題である。英文の意味はわかるが、それを英語で何と言い表すかが難しかった学生もいたようだが、英語でインプットし、英語でアウトプットするきっかけ作りとしては良かったのではないかと考えている。第4項目が文法問題であり、これはTOEICのPart 5を意識して作成した。TOEICの文法問題でよく問われるパターンに合わせてシャーロック・ホームズのテキストからそのまま抜粋し解答するものである。当初は間違いが多かった学生も、徐々に文法的な事項にも注意しながら読むようになったようだ。第6項目はUseful Expressionsと題して、テキストの表現を「自分の表現」として増やすやり方を提示した。少し複雑な文章や使えそうな表現を抜き出し、英作文方式で解答するようにした。出題する文章は教員が考えているため、学生によっては「自分の表現」ではないと感じる人もいたであろう。プリント内で

は3問程度にとどめたが、口頭で一部を変えて問題を提示し、「自分の表現」を増やすようにと指示した。会話が苦手だと感じる学生の多くは単に「英語力」だけが問題なのではなく、練習不足が原因でもある。何かを話す時の表現のヒントは普段の学習内にいくらでもあり、それをもとに自分ならばどう言うかを考えて「自分の表現」として増やす必要がある。そのやり方を提示し、定着させることで、自分で学習できるように指導した。

4. 学生によるフィードバック

平成26年1月、半期間の授業に関して学期末アンケートを行った。回答は初回アンケートと同様に3タイプに分類するものと、自由記述のものを用意した。これにより、教員が設定した授業構成や到達目標についてどう思ったのか、率直な意見を聞くことができた。また同時に、初回アンケートと学期末アンケートには学生の氏名を記入することを求めていたため、半期間で考え方に違いが出たのかも探ることができた。本章では商経15人、児教18人、合計33人のアンケート結果を学生のコメントを交えて、分析・考察する。質問は5項目あり、その内容およびデータは本稿末尾に資料3として添付している。

4.1. 設定目標への反応

質問1では教科書の難易度についてたずねた。「難しい」、「やや難しい」、「ちょうどよい」、「やや易しい」、「易しい」の5段階評価のうち、33人のうち28人（全体の84.8%）が「ちょうどよい」を選択し、4人（全体の12.1%）が「やや易しい」、そして1人（全体の3.0%）が「やや難しい」を選択した。教科書の難易度に関しては、概ね、学生のレベルに適したものだといえる。

質問2では授業内容について「勉強になった、楽しかった」、「ふつう」、「勉強にならなかった、楽しくなかった」の3つに分類することを求めた。項目は大きく分けて①テキスト精読・訳出、②DVD鑑賞、③補足プリントの3項目で、③についてはさらに細分化して、プリントの構成に従って5項目を3つに分類するように求めた。商経と児教の2クラスを合わせた結果は図6のようになった。

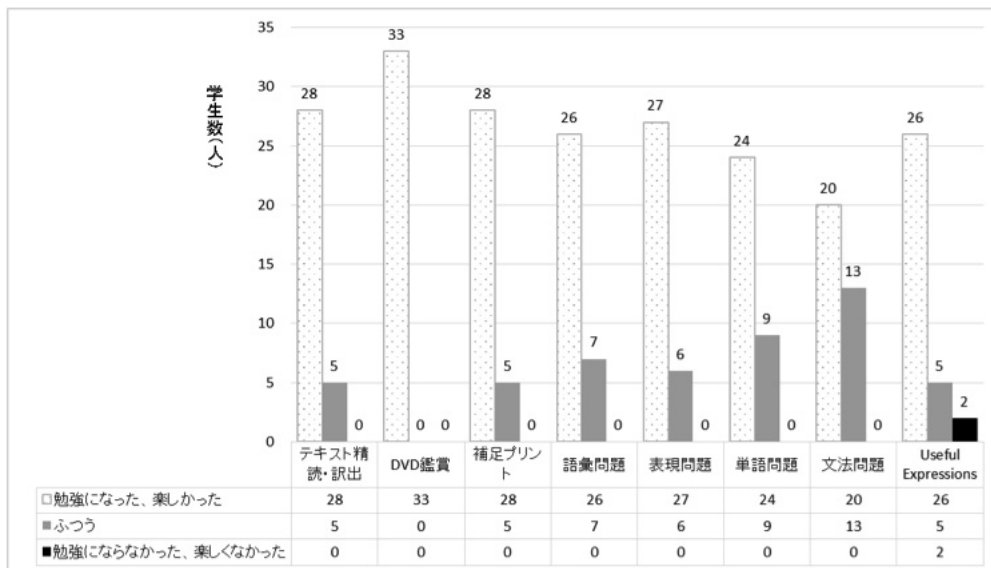


図6. 授業内容への反応

「勉強になった, 楽しかった」ものとして多くの学生に選ばれたものは「DVD鑑賞」で、33人全員から支持が集まった。初回アンケートで「洋画を見る」について38人中16人が「好き, よくする」, 20人が「ふつう, たまにする」を選択していたことを考え合わせると当然の結果ともいえる。学生からも「DVDなどの映像をみると, 興味が深まります」や「映像を見ることで内容が頭に入ってきやすかった」とのコメントが寄せられ, మరి スニング教材としての効果も高かったようである。「テキスト精読・訳出」と「補足プリント」にはともに「勉強になった, 楽しかった」が28人ずつ, 「ふつう」には5人ずつの回答があった。また「補足プリント」に関してはさらに細分化し, 5項目それぞれについて3つに分類するように求めた。TOEICを意識した文法問題に関して, 20人は「勉強になった, 楽しかった」と答え, 13人が「ふつう」を選択している。他の質問項目に比べ, この項目だけが「勉強になった, 楽しかった」と「ふつう」の得票数に大きな差がない。すでに文法に対してかなりの理解力があつたか, それともTOEICを意識した学習に入っていないためか, どちらかが原因だと考えられる。

唯一, Useful Expressionsの項目にだけ, 2人の学生から「勉強にならなかった, 楽しくなかった」との反応があつた。本アンケートの質問4で「英語の授業でやってみたいことは何ですか?」とたずねているのだが, 興味深いことにこの2人は「英会話」「スピーキング」と答えている。Useful Expressionsの目的は, 自分の表現を増やすやり方を提示することにあつた。読んだものの中にあつた表現を「自分のもの」とするために書いて貯めていく, という作業はスピーキングにも直結するものであると考えている。しかしながらとにかく話したいと考える学生には物足りなかつたのかもしれない。

質問3では, 到達目標に関して7項目の質問をした。詳細は本稿末尾の資料3を参照し

ていただきたいのだが、概ね、①細かな読み、②正しい意味、③読解力、日本語力、④異文化理解、⑤文学を楽しむ、⑥共通の勉強法、⑦使える英語への転換、の7項目である。この中で「勉強になった」、「得意になった」、「いいきっかけになった」など、肯定的な反応を持ったものを複数選択するように求めた。得票数の少ない順に並べ替えると、図7のような結果になった。

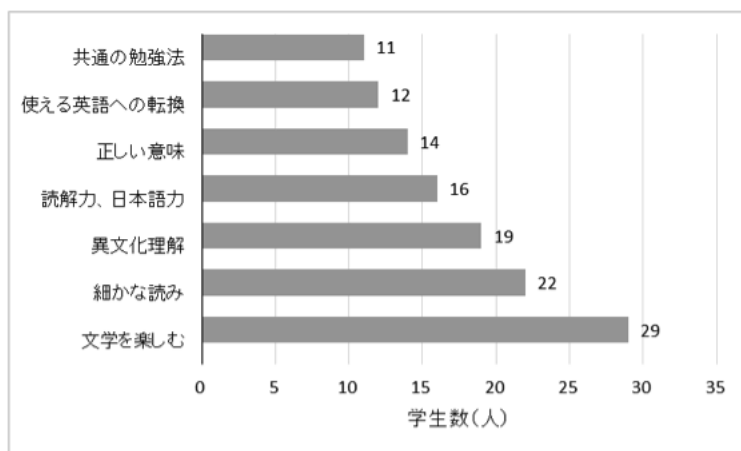


図7. 肯定的な反応を持ったもの

教員側の期待もむなしく、「共通の勉強法」が最も得票数が少なく（11人）、それに次ぐのが「使える英語への転換」（12人）であった。一方、最も多くの反応を得たのが「文学を楽しむ」（29人、全体の87.9%）であった。初回アンケートでは「洋書や英字新聞を読む」の項目に関して、合計38人中7人（全体の18.4%）が「ふつう、たまにする」、31人（全体の81.6%）が「嫌い、苦手、全くしない」を選択していたことを考えると、大きな収穫だったといえる。実際、次の質問4で英語の授業でやってみたいことをたずねたところ、「文学作品を使った授業を受けたい（今回のような）」、「この授業みたいに物語を読んで訳していく形がやってみたい」、「ほかの作品も授業して欲しい」などのコメントがあった。

4.2. リーディングとスピーキングの二極化

質問4では大学の英語の授業でやってみたいことをたずねた。すでに述べたように、「(文学) 作品」や「読む」をキーワードにして回答する学生が約半数を占め、文学部以外の学生も文学作品に興味があることがわかった。「物語や神話などを訳していく」、「難解な文章を辞書をフル活用して頑張って理解する」、「映画を見たり、英字新聞を読む」、「世に出ている有名な文学作品を原書で読むこと」、「もっと有名だけど内容が…っていう物語を読みたい」、「ディズニーのストーリーの長文など、親しみがあるもの」など、読むことへの興味が増したことは間違いなさそうである。

その一方で、「グループディスカッション」、「英語による発表やプレゼンテーション」、「自分で考えて発表とかができる機会が欲しい」との回答もあった。本講義ではテキスト

用に編集された音声を使ったリスニング課題とディクテーションをやり、DVDを使って実際の会話を聞く機会は十分にあった。またテキスト内にある表現をどう使うか、またどのようにして表現力を磨いていくかのやり方についても十分に説明したつもりである。聞き取ったもの、実際に使われるものを元にして、授業内で「使う」ことにはあまり比重を置かなかったのは事実であるため、クラス全員が参加できるようなスピーキングの練習機会を持つ授業を考える必要があるようだ。

4.3. 「考えたこと」「学んだこと」

質問5には、この授業を受けてみて考えたこと、学んだことなどを自由に書いてもらった。物語を読むことへの楽しさや興味が増した学生、DVDで実際の会話を確認して表現を学んだ学生、辞書の言葉をそのまま使うのではなく、状況に合わせて訳すコツを学んだ学生、左から右へ、前から後ろへと訳すコツを掴んだ学生、そしてTOEICを受けようと決意した学生など、学生数に応じて様々な学びがあったことが推察できた。学生Gは「文学作品をまるまる1冊学ぶ授業は初めてで楽しかった」と記しており、この講義が文学作品に触れる唯一の機会だったことを明かしている。授業前に設定した到達目標と合わせて考えると、1) 状況や設定に合う日本語を選ぶことで、細かな点に気づく力をつける、2) 英語力だけでなく、国や時代が違う異世界・異文化についても理解を深める、に関してコメントが多く集まったようだ。

5. まとめ

本稿の冒頭では、現代社会が「コミュニケーション能力」を求め、また学生たちも「コミュニケーション」を取りたがっている様子について触れた。しかしながら実はこの「コミュニケーション」という語が漠然としていること、それが学生のコメントからも推察できることを示した。初回アンケートで単に「英語を話したい」と記していた学生Hは学期末のアンケートで、「いろいろところで使える英語があった」と感想を述べ、また学生Iは「英語の習得だけを目指するよりも、外国の文化を学ぶということを絡めると英語が楽しくなるんだとわかりました」と記していた。英語で話したい、でも話せないと考える学生は大きく2タイプに分けられる。表現するための英語力（語彙・文法）が不足しているタイプと、知識や興味が不足しているタイプである。たとえTOEIC等の検定で申し分のない成果を出していようと、「自分の表現」がないためにうまく会話ができなかったり、あるいは会話を持続させるネタ（共通知識）が不足していることがある。それを補うための勉強法やヒントを与えることが、本講義の大きな目的であった。ここで紹介したHやIのような感想を持った学生たちは、これからも一人で「自分の表現」を集められるであろうし、「コミュニケーション」を楽しめる人になっていくであろうと思う。大学は社会に出る前に学べる最後の場所である。この貴重な時間に学生の知識欲を刺激し、また「英語で」読みたい、聞きたい、話したい、書きたいと考える学生が増えるように、教員としても学び続ける努力をしていく。

参考文献

- 大津由紀雄, 江利川春雄, 斎藤兆史, 鳥飼玖美子『英語教育, 迫り来る破綻』(ひつじ書房, 2013)
- 大塚雅貴「英語教育における教材としての文学作品の意義: Communicative Language Teaching の視点から」『北海道教育大学紀要教育科学編』58 (2007): 151-163
- 久世恭子「文学教材を用いた授業: 大学の英語教育における事例研究」『東京大学言語情報科学』9 (2011): 63-79
- 斎藤兆史「文学を読まずして何が英語教育か」『英語教育』53.7 (2004): 30-32
- 高橋和子「短編小説を用いた大学英语の授業: Katherine Mansfieldを中心に」『東京大学言語情報科学』8 (2010): 101-117
- 中谷ひとみ「おいしい料理をほんの少し変わったスパイスの味付けで:『国際共通語としての英語』学習に文学作品を生かす」『岡山大学大学院社会文化科学研究紀要』32 (2011): 1-14
- 幡山秀明「英語教育と文学的教材 (1)」『宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要』28 (2005): 493-498
- 深谷素子「英語授業における文学作品活用の試み-教員の専門分野に偏らず, 訳読偏重に陥らず, 文学作品を生かすには何をすべきか」『成蹊大学一般研究報告』42 (2009): 1-19
- 文部科学省「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」(2003)
- 「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」グローバル人材育成推進会議 (2012)

資料1. 初回アンケートおよび回答結果（有効数：商経17人，児教21人，合計38人）

注1) %は少数点第二位を四捨五入したものから算出。

注2) 四捨五入により100%にならない場合がある。

1. 以下の4技能のうち，どの技能を最も重視して学習してきましたか？（1つ選択）

	商経(17人)		児教(21人)		合計(38人)	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
リーディング(R)	10	58.8	15	71.4	25	65.8
リスニング(L)	1	5.9	2	9.5	3	7.9
ライティング(W)	5	29.4	4	19.0	9	23.7
スピーキング(S)	1	5.9	0	0.0	1	2.6

2. 以下の4技能のうち，どの技能を最も重視して身につけたいですか？（1つ選択）

	商経(17人)		児教(21人)		合計(38人)	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
リーディング(R)	4	23.5	1	4.8	5	13.2
リスニング(L)	6	35.3	7	33.3	13	34.2
ライティング(W)	0	0.0	0	0.0	0	0.0
スピーキング(S)	7	41.2	13	61.9	20	52.6

その理由（内容の性質上，一部を掲載しています。）

リーディング（5人）

- ・英語の原書を読みたいから
- ・ネットで英語のニュースが読めれば，情報源が増えるから

リスニング（13人）

- ・海外に行ってみたくので，英語を聞き取れるようになりたい
- ・日常生活で最も重要だと思うから
- ・英語の映画も聞き取れるようになりたいから
- ・話すこと以前に，英語を聞き取ることに慣れていないから

スピーキング（20人）

- ・英語は実践的に使っていないと身につかないと思うから
- ・伝える力が大切だと思うし，苦手だから
- ・一番実用的だと思うから
- ・外国の人と交流したいから
- ・海外旅行で役に立てたいから
- ・英語で話せるようになりたいから
- ・実際に会話ができれば意味がないから

3. 海外経験はありますか？（旅行，短期語学研修を含む）

	商経(17人)		児教(21人)		合計(38人)	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
あり	3	17.6	10	47.6	13	34.2
なし	14	82.4	11	52.4	25	65.8

(行き先)：シンガポール，台湾，韓国，カンボジア，ハワイ，ドイツ，上海，サイパン，マウイ島，オーストラリア，マレーシア，中国

4. 以下の項目について，「○（好き，得意，よくする）」，「△（ふつう，たまにする）」，「×（嫌い，苦手，全くしない）」の3つに分類してください。

	商経(17人)						児教(21人)						合計(38人)					
	○		△		×		○		△		×		○		△		×	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
洋書や英字新聞を読む	0	0.0	4	23.5	13	76.5	0	0.0	3	14.3	18	85.7	0	0.0	7	18.4	31	81.6
洋楽を聴く	4	23.5	7	41.2	6	35.3	9	42.9	10	47.6	2	9.5	13	34.2	17	44.7	8	21.1
英語の音声(歌以外)を聞く	1	5.9	8	47.1	8	47.1	4	19.0	6	28.6	11	52.4	5	13.2	14	36.8	19	50.0
洋画を見る	7	41.2	9	52.9	1	5.9	9	42.9	11	52.4	1	4.8	16	42.1	20	52.6	2	5.3
単語を覚える	1	5.9	10	58.8	6	35.3	1	4.8	15	71.4	5	23.8	2	5.3	25	65.8	11	28.9
英語で文章を書く	0	0.0	7	41.2	10	58.8	1	4.8	12	57.1	8	38.1	1	2.6	19	50.0	18	47.4
英語で会話をする	0	0.0	3	17.6	14	82.4	0	0.0	6	28.6	15	71.4	0	0.0	9	23.7	29	76.3
辞書で調べる	1	5.9	12	70.6	4	23.5	5	23.8	13	61.9	3	14.3	6	15.8	25	65.8	7	18.4
海外旅行・語学実習に行く	0	0.0	3	17.6	14	82.4	0	0.0	5	23.8	16	76.2	0	0.0	8	21.1	30	78.9
検定試験を受ける	0	0.0	5	29.4	12	70.6	0	0.0	10	47.6	11	52.4	0	0.0	15	39.5	23	60.5

5. 英語の検定（英検，TOEIC，TOEFL，IELTS）で目標があれば記入してください。

「英検」…準2級，2級，準1級

「TOEIC」…500点，600点，700点

「TOEFL」および「IELTS」には記入なし

資料 2. *Mystery Tour with Sherlock Holmes* 補足プリント (Unit. 9 用)

Date	Student ID	Name

Quiz

1. 以下の語句について、1~4は日本語で意味を、5~7は指示に従って、8は英語で書きなさい。

- 1) observer () 2) protest ()
 3) examine () 4) loose ()
 5) arrive→名詞 () 6) motion ⇨ ()
 7) identical ⇨ () 8) …をブラブラうろつく ()

2. 以下の日本語の意味に合うように、英文の空所に単語を記入しなさい。

1) 教科書の値段が学生を悩ませた。

The price of the textbook () students.

2) その猫は鏡で自分の姿を見て、驚いたようだった。

The cat looked at herself in the () and seemed surprised.

3) 私は花束を抱えて、母のお見舞いに行った。

I visited my mother in hospital with a () of flowers.

3. この説明文に合う英単語は何でしょう。

A large, strong case or box used for taking on a journey. _____

4. 以下の各英文について、文法的に正しいものを A~D の中から選びなさい。

1) Mr. Rucastle's stories made her —— till she cried.

- A) laugh B) to laugh C) laughing D) laughter

2) As we —— it, I heard the rattling of a chain and the sound of a large animal moving about

- A) approached B) approached in C) approached to D) approached into

Useful Expressions 「…しないようにと言う」 say to/warn/order 人 not to…

He warned her not to go out at night because they let the dog loose on the grounds.

(彼は私に夜は外に出ないように、犬を敷地に放すからと警告した。)

1) 司書は学生に、図書館に水筒(a water bottle)を持ち込まないようにと言った。

2) 警官は僕に、ここでたばこを吸わないようにと警告した。

3) 両親は子供に、これ以上問題を起こす(cause trouble)など命じた。

資料3. 期末アンケートおよび回答結果（有効数：商経15人，児教18人，合計33人）

注1) %は少数点第二位を四捨五入したものから算出。

注2) 四捨五入により100%にならない場合がある。

1. 教科書の難易度はどうでしたか？

	商経(15人)		児教(18人)		合計(33人)	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
難しい	0	0.0	0	0.0	0	0.0
やや難しい	1	6.7	0	0.0	1	3.0
ちょうどよい	10	66.7	18	100.0	28	84.8
やや易しい	4	26.7	0	0.0	4	12.1
易しい	0	0.0	0	0.0	0	0.0

2. 以下の項目について、「○（勉強になった，楽しかった）」、「△（ふつう）」、「×（勉強にならなかった，楽しくなかった）」の3つに分類してください。

	商経(15人)						児教(18人)						合計(33人)					
	○		△		×		○		△		×		○		△		×	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
テキスト精読・訳出	13	86.7	2	13.3	0	0.0	15	83.3	3	16.7	0	0.0	28	84.8	5	15.2	0	0.0
DVD鑑賞、内容確認	15	100.0	0	0.0	0	0.0	18	100.0	0	0.0	0	0.0	33	100.0	0	0.0	0	0.0
補足プリント	12	80.0	3	20.0	0	0.0	16	88.9	2	11.1	0	0.0	28	84.8	5	15.2	0	0.0
語彙問題	12	80.0	3	20.0	0	0.0	14	77.8	4	22.2	0	0.0	26	78.8	7	21.2	0	0.0
表現問題	14	93.3	1	6.7	0	0.0	13	72.2	5	27.8	0	0.0	27	81.8	6	18.2	0	0.0
単語問題	11	73.3	4	26.7	0	0.0	13	72.2	5	27.8	0	0.0	24	72.7	9	27.3	0	0.0
文法問題	10	66.7	5	33.3	0	0.0	10	55.6	8	44.4	0	0.0	20	60.6	13	39.4	0	0.0
表現応用問題	12	80.0	2	13.3	1	6.7	14	77.8	3	16.7	1	5.5	26	78.8	5	15.2	2	6.0

3. 本講座の到達目標は以下のようなものでした。「勉強になった」、「得意になった」、「いきっかけになった」など、肯定的な反応を持ったものを選択してください。（複数選択可）

	商経(15人)		児教(18人)		合計(33人)	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
細かな読み	11	73.3	11	61.1	22	66.7
辞書、正しい意味	7	46.7	7	38.9	14	42.4
読解力、日本語力	6	40.0	10	55.6	16	48.5
異文化理解	10	66.7	9	50.0	19	57.6
文学を楽しむ	14	93.3	15	83.3	29	87.9
共通の勉強法	8	53.3	3	16.7	11	33.3
使える英語に	6	40.0	6	33.3	12	36.4

4. 英語の授業でやってみたいことを自由に書いてください。（一部掲載）

- ・ 文学作品を使った授業を受けてみたい（今回のような）
- ・ 対話，コミュニケーション，使えるフレーズなど
- ・ 難解な文章を辞書をフル活用して頑張って理解する
- ・ 物語や神話を訳していく

- ・実際に外国の人と英語でコミュニケーションをとってみたい
- ・映画を見たり，英字新聞を読む
- ・スピーキングをする
- ・世に出ている有名な文学作品を原書で読む
- ・グループディスカッション
- ・自分で考えて発表とかができる機会が欲しい
- ・ディズニーのストーリーの長文など，親しみがあるものについて
- ・英語によるコミュニケーション，発表，プレゼンテーション
- ・もっと有名だけど内容が…っていう物語を読みたい

5. 本講座を受けて考えたこと，学んだことなど，自由に書いてください。(一部掲載)

- ・DVDを見たり，とてもわかりやすく，英語に対する気持ちが少しプラスになった
- ・もっと英語で物語を読みたい
- ・物語を読むのが楽しいと思いました
- ・英語の物語を読むことへの壁をあまり感じなくなってきた
- ・文学作品を通して英語を学ぶことができてよかったです
- ・リーディングの楽しさを改めて実感できた
- ・バランスの良い（文法，語彙などの）授業で，英語力の低下をとどめるのに役立った
- ・英語の習得だけを目標にするよりも，外国の文化を学ぶということを絡めると英語が楽しくなるんだとわかりました
- ・もっと外国の文学作品について知りたいと思った
- ・文学作品をまるまる1冊で学ぶ授業は初めてで楽しかったです
- ・文を読んで映画をみると，理解しやすかった
- ・辞書にのっていないものでも，よく使われる意味がある
- ・高校までのいわゆる「英語の教科書のことば」での日本語訳ではなく，実際に使われる日本語の使い方と訳すコツを学んだ
- ・英語の授業を通して，映画を見て，異文化・異世界への興味・関心を深めることができた
- ・細かい読みが大事だと学んだ
- ・訳出を前からできるようになってきました
- ・ただ辞書のとおり訳していくのではなく，意味が伝わるように工夫して訳していくという練習がたくさんできました